

近藤悟先生を偲んで

日本福祉大学 情報社会科学部 前学部長

片方信也

Shinya KATAGATA

近藤悟教授の告別式は、2005年2月4日に行われました。病に倒れられて休職され、病院で療養中のところを最初にお見舞いにお伺いしたのは2003年11月21日でした。そのときは手術後まもなくのことでしたが、お元気な様子でこの分ならまもなく復帰されることだろうと期待していました。病に気付かれたのは、奥様だったということでした。新車を手に入れられ、奥様とドライブ中に顔面に異常を認められたのが初めであったようです。それで、その途上病院にかけつけたところ、すぐ入院が必要という診断結果であったということでした。

大学への復帰は近いのではとの期待を抱いたのですが、それに反して容態の回復が進まず、病院での加療のあとはご自身の希望によりご自宅で過ごされていたようです。2度目にお伺いしたのは2004年8月10日で、そのときはご自宅で療養中でした。状態は最初のお見舞いのときよりもよくなってはいなかったようでした。そして、職場への復帰への期待がかなえられず、かえらない人となりました。本当に残念です。

病休から休職に入るまでは、情報・経営開発研究科の情報系専攻主任を務めておられ、大学院の改革に取り組んでこられました。多方面に分かれている講義科目や演習などの再編で労を惜しまずまともに尽力されました。そして、次の改革でのご活躍が期待されていたのです。大学院改革は道半ばの段階だったと思います。

学部の学生へも真摯に接してこられました。卒業研究で先生のゼミを選ぶ学生は毎年多く、人気の高いゼミであったと思います。「教員プロフィール2003」には、新入生への一言で「一度しかない人生、悔いなく送りたいものです。そのためにも十分な時間のある大学時代に自らの人生をどう生きるかについて一度は真剣に考えてほしい。そこから自ら選んだ新たな人生が始まると思います。」と述べています。これは、近藤先生が講義やゼミで学生に送り続けたメッセージであったのではないかと思います。

わたしは、ときおり通勤時にJR武豊線などで同席することがありました。八王子の自宅から通っておられましたが、「往き来は大変ですね」という問いかけには「新横浜まではいつも車で妻の送迎があります」という御返事が返ってきたことを思い出します。病院へお見舞いにお伺いした時が奥様と直にお話する最初のお話でしたが、その折愛妻家である先生の様子を伺い知ることができました。

また、大学の業務で忙しくすることにはあまり愚痴をもらさず、よくまわりの意見を聞いてまとめてくれていたと思います。学問の上でもまた社会的にも活動の範囲が広く、その蓄積を教育の現場にさらに旺盛に生かしていただくことが期待されていました。学生思いの先生の姿勢が私たちにいろいろな刺激を与えてきました。学生を育てる学部教育のより一層の充実をはかることが、近藤先生の遺志を受け継ぐことにつながると思っています。